# わが国における乳児の頭蓋内出血による死亡に関する分析 ― 特に月齢による特徴について

（分担研究： 新生児・乳児のビタミンK欠乏性出血症の予防に関する研究）

母里啓子* 衛藤 隆**

## 要 約

人口動態統計より，昭和50年～60年の1歳未満の脳血管疾患死亡数を調査し，死亡時期，季節に関し，地域別，年代区分別の分析を行った。生後7日以後4週未満の死亡が年代区分（Ⅰ期： 昭50－52，Ⅱ期： 昭53－55，Ⅲ期： 昭56－60）を下るに従い減少が著明であったが，生後4週以後2カ月未満，2カ月以後1歳未満では年代区分毎の変化は顕著でなかった。このほか，性差（男＞女），季節差（秋，夏に多い傾向）が認められた。

見出し語： 頭蓋内出血，乳児，脳血管疾患，人口動態統計

## はじめに

昨年度は，乳児の頭蓋内出血の動向を知るため，人口動態資料を用い地域別および年代別の比較を行った。

今年度は，同様の資料を用い，新生児期，乳児期について死亡の時期による検討と，季節による変動について検討を行った。

## 研究方法

厚生省の人口動態統計を用い，昭和50年から昭和60年までの1歳未満における都道府県別死亡数，脳血管疾患死亡数（死因統計基本分類430～438）を調査した。年代区分を第Ⅰ期（昭和50年～52年），第Ⅱ期（昭和53年～55年），第Ⅲ期（昭和56年～60年）とした。地域の分類法は第1回全国調査で用いた地域区分を一部修正して用い，北海道，東北，関東（東京を除く），東京，中部，近畿，中国，四国，九州，沖縄というように区分した。また，新生児期および乳児期の死亡時期については，生後7日未満，生後7日以後4週未満（以下4週未満と記す），生後4週以後2カ月未満（以下1カ月と記す），生後2カ月以後12カ月未満（以後2カ月以降と記す）の4種類に分類し検討した。

## 結 果

まず，全死因による1歳未満の乳児の死亡について，年代別または季節別に死亡時期の比較を行った。（図1） 生後7日未満が最も死亡数が多く，生後1カ月まで順次減少し，2カ月以降になるとやや増加していた。年代区分毎にみると，年代を下るほど死亡数が減少する傾向が見られ，特に生後7日未満の早期新生児期において顕著であった。季節による死亡数の変化はほとんど認められなかった。

* 国立公衆衛生院疫学部
（Dept. of Epidemiology, the Institute of Public Health）
** 同 母性小児衛生学部
（Dept. of Maternal and Child Health, the Institute of Public Health）

次に，脳血管疾患死亡（以下，頭蓋内出血による死亡と表現する）について述べる。

1歳未満の頭蓋内出血による死亡を時期別にみると，図2に示されるように第Ⅰ期には4週未満のところにピークが見られたが，年代を経るに従いこの部分の死亡が最も減少していた。生後7日未満についても同様な減少傾向が認められたが，1カ月の所では第Ⅰ期に比し，第Ⅱ，Ⅲ期の方が増加していた。また2カ月以降の所では年代による差はほとんど認められなかった。

男女別の比較を行うと，図2－A，Bに示されるように，生後7日未満を除く各時期において男児の方が女児より死亡数が多かった。

1歳未満の頭蓋内出血による死亡数の時期による分布を百分率で表わし，年代による推移を男女それぞれについてみたのが図3－A，Bである。男児，女児いずれについても，1歳未満の頭蓋内出血による死亡全体に占める割合は，生後7日未満，4週未満では減少し，1カ月，2カ月以降では増加していた。

相対的に死亡割合の増加していた1カ月，2カ月以降について地域別，年代別の比較を行ったのが図4－A，Bである。1年当りの死亡数はいずれの地域においても7未満と非常に少なく，あまり明確なことは言えないが，年代による変化は概して少なく，生後1カ月の死亡で近畿地方においてやや年代による増加傾向を認めたに過ぎなかった。

季節による変化は，図5に示される如く，4週未満，1カ月の死亡が秋，夏に多い傾向が認められたが，生後7日未満，2カ月以降では一定の傾向は認められなかった。

## 考　　察

乳児期のビタミンK欠乏性出血症による頭蓋内出血が原因で死亡した子どもは人口動態統計上は死因統計基本分類430～438の脳血管疾患の中に含まれるはずである。乳児期早期の頭蓋内出血による死亡は新生児期については近年かなり減少したが，1カ月，2カ月以降ではあまり大きな変化はなかった。第Ⅲ期において1歳未満の頭蓋内出血死亡数に占める1カ月，2カ月以降の死亡数の割合は男児で各々38.5％，44.3％，女児で33.3％，47.1％と相当部分を占めており，相対的に1カ月，2カ月以降の時期の死亡が問題になると言える。これらの内，ビタミンK欠乏症の関与は全く不明であるが，少なくとも頭蓋内出血による死亡が1カ月，2カ月以降の時期に減少するほどの大きな要因はこの11年間には作用しなかったといえよう。

性差については，従来指摘されていたのと同様男に高い傾向がみられたが，季節差はあまり顕著ではなく，全死因と比較すると秋，夏に多い傾向がみられたのみであった。

## 結　　論

昭和50年から昭和60年までの11年間について，1歳未満の頭蓋内出血による死亡を検討し，以下の結果を得た。

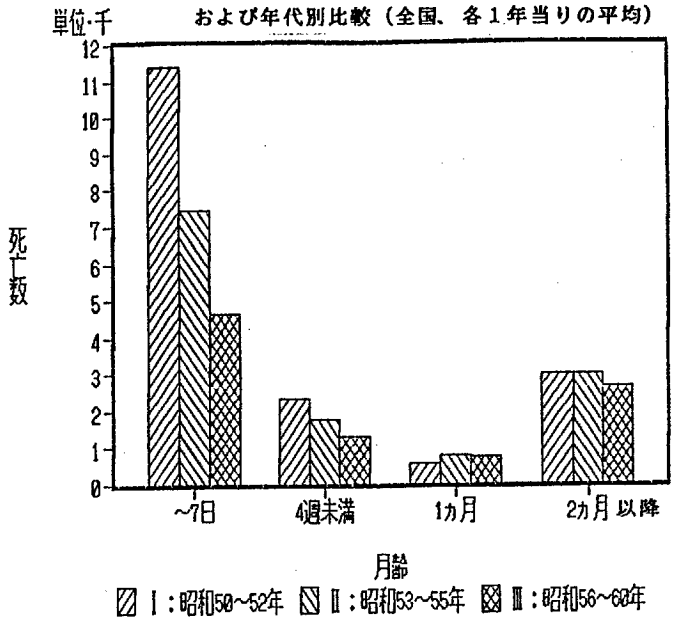
1）生後7日未満および4週未満においてはⅠ期，Ⅱ期，Ⅲ期と年代を下るに従い著明に減少した。

2）生後1カ月，2カ月以降については減少はみられず，1カ月の所では，Ⅰ期からⅡ期にかけてはむしろ増加していた。

3）生後7日未満を除く各時期において男児の方が女児より死亡数が多かった。

4）季節による変化は，4週未満，1カ月で秋，夏に多い傾向が認められたが，顕著とは言いがたかった。

A．全死因による乳児死亡数の死亡時月齢の分布
および年代別比較（全国、各１年当りの平均）




B．全死因による乳児死亡数の死亡時月齢の分布
および季節別比較（全国、各１年当りの平均）

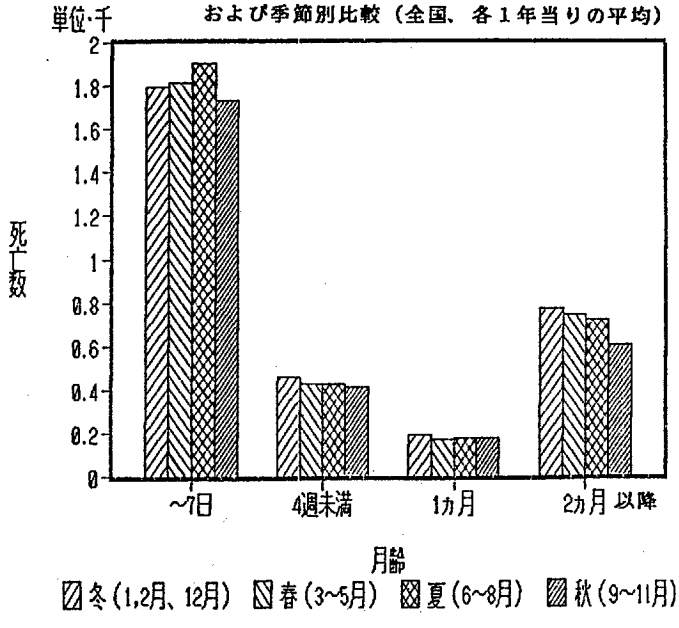



図１　全死因による乳児死亡の死亡時月齢の分布
および年代別、季節別比較

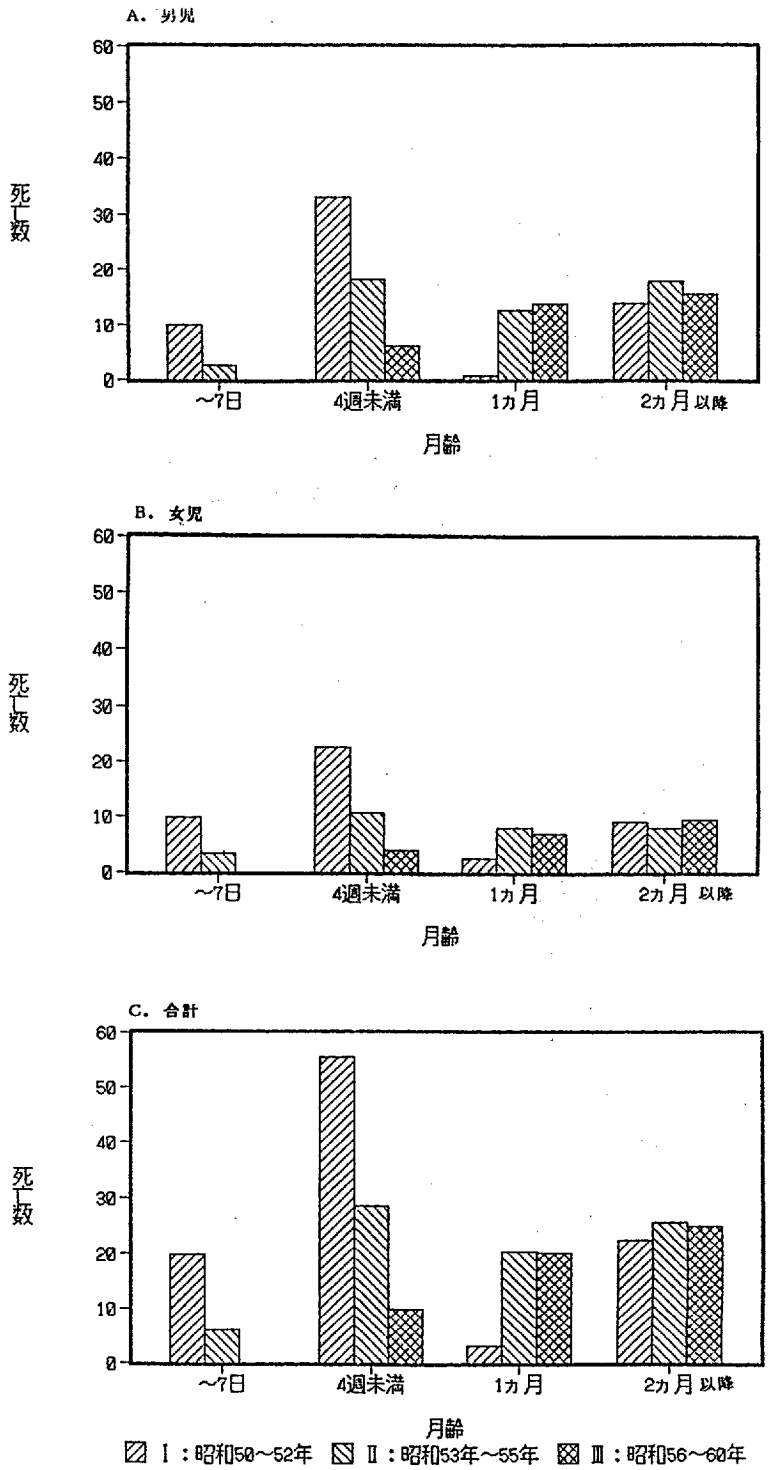



**図２　新生児期・乳児期の頭蓋内出血死亡数の死亡時期別分布および年代別比較**
**（全国、各１年当りに換算した死亡数）**

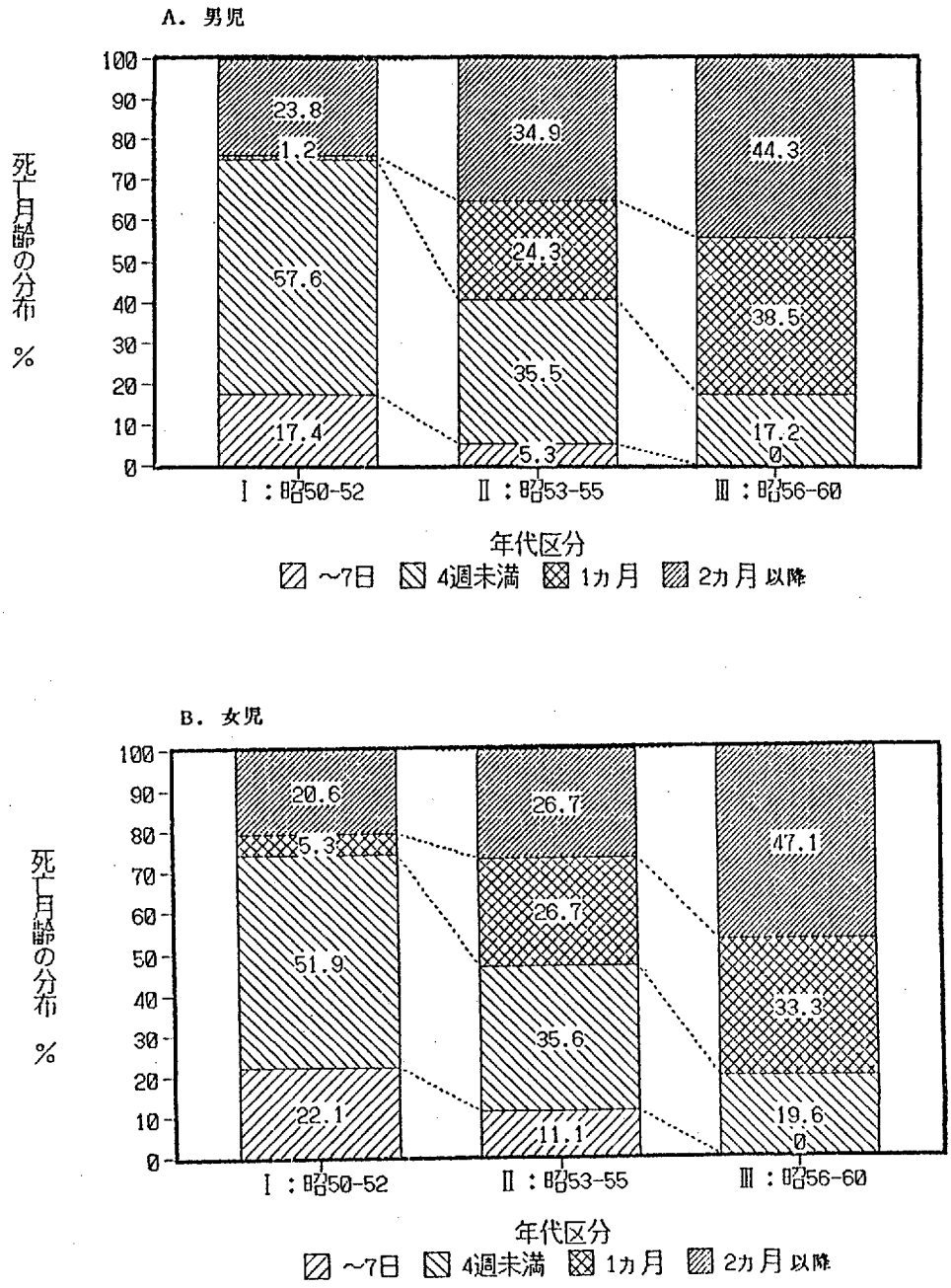
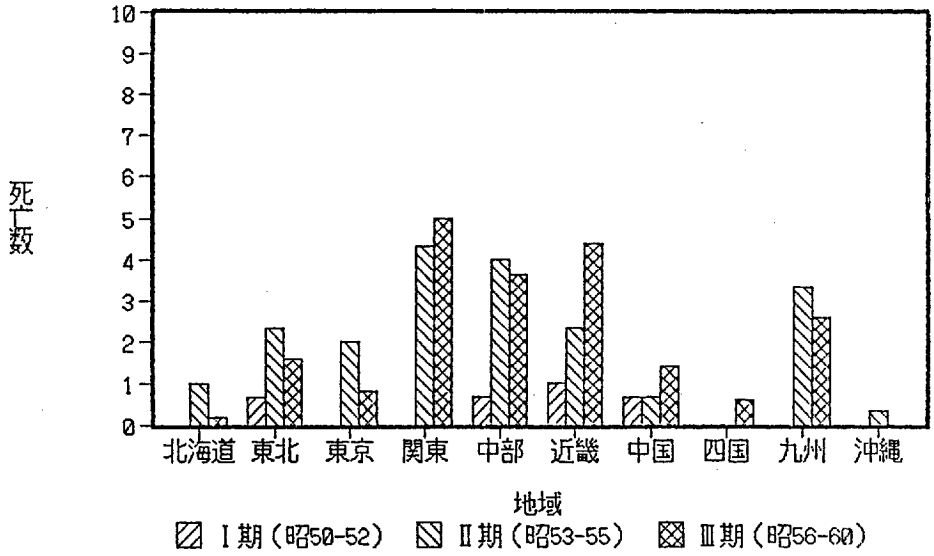



図3　新生児・乳児頭蓋内出血の月齢別死亡数の分布の年代別比較（全国）

A. 生後1ヵ月




B. 生後2ヵ月以降

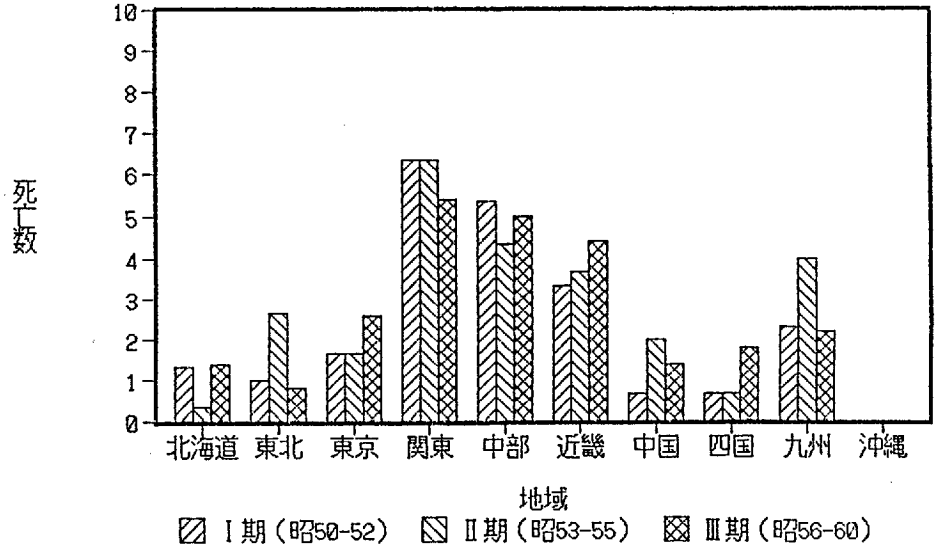



図4　地域別年代別乳児頭蓋内出血死亡
(死亡数は1年当りに換算)

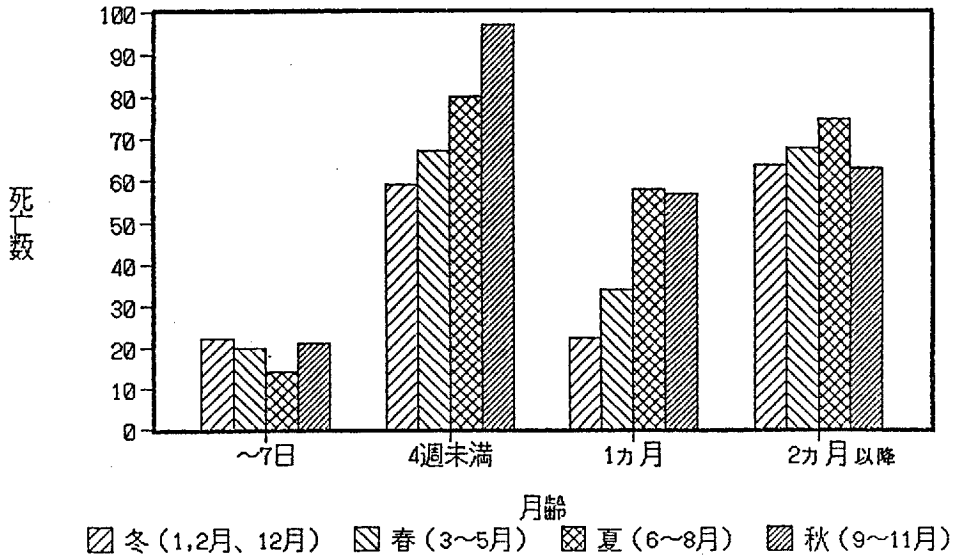



図５　新生児期・乳児期の頭蓋内出血による死亡時期の
季節別比較（昭和50年～60年、全国）

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約

人口動態統計より,昭和50年～60年の1歳未満の脳血管疾患死亡数を調査し,死亡時期,季節に関し,地域別,年代区分別の分析を行った。生後7日以後4週未満の死亡が年代区分(Ⅰ期:昭50-52,Ⅱ期:昭53-55,Ⅲ期:昭56-60)を下るに従い減少が著明であったが,生後4週以後2ヵ月未満,2ヵ月以後1歳未満では年代区分毎の変化は顕著でなかった。このほか,性差(男>女),季節差(秋,夏に多い傾向)が認められた。